

戦国の世が生んだ

日ノ本一の角力者

すまいびと

六助の義

梅津三男

もくじ

はじめに	1
序	4
六助の義	9
『六助の義』の関係略図	10
帰還	11
安住の地を求めて	13
犀川の流れ	18
失踪の理由	27
父の出奔	30
一味齋との出会い	42
一味齋道場	54
犬ヶ岳入峰	62
体幹づくり	70
一味齋の闇討ち	83

仇討ちの遍路	95
小倉武士三人の彦山への遠出	97
技量検分	105
微塵弾正 小倉城下に	112
一味斎妻子の彦山路	118
再会	122
弾正との御前試合	126
偽計の発覚	130
雪舟庭での供養	138
弾正との再試合	149
仇討ち	156
軍陣祭	160
毛谷村の焦燥	174
日ノ本一の御前角力	184
六助の勝ち抜き	195
飛入	222

中入り後 227

黒田孝高の策略 246

産女の怪力 258

細川の黒牛 284

又蔵の地力 300

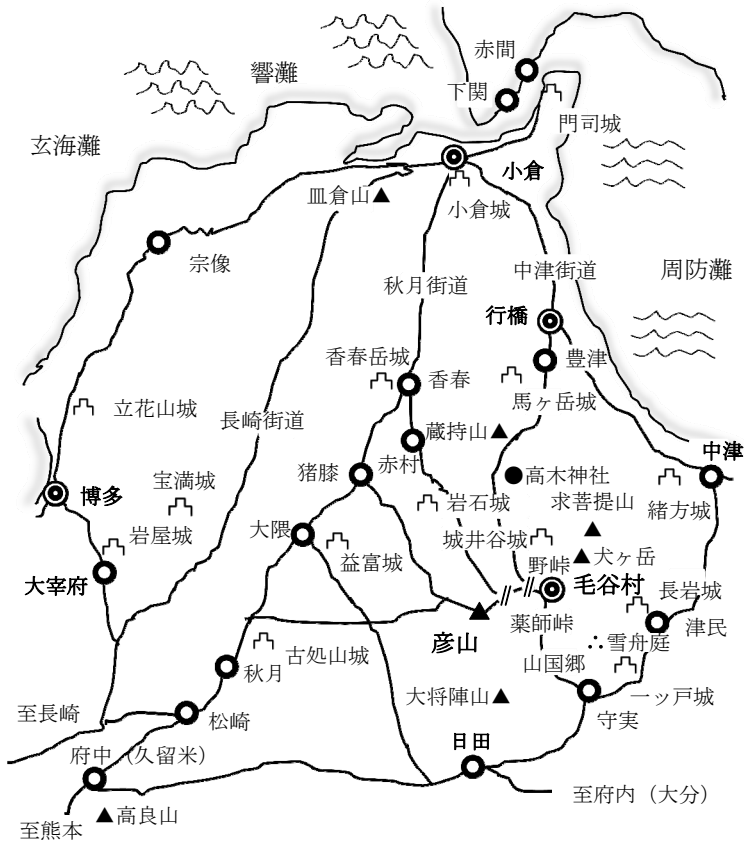
旅籠の一夜 310

資料1 六助の出生・死亡の諸説 318

資料2 六助の年譜 320

資料3 参考文献・資料 372

資料4 英彦山の薬草 374



— 『六助の義』の関係略図 —

帰還（抜粋）

この地の名主彦右衛門家の表門の石段の前に、身につけたものは破れ、顔髭は茫々ぼうぼうにし、ブト追いにしては大きな枯れ草の束を腰に下げ、この世の人とは思われない者が立っていた。この様子を名主の下男が、屋敷の周囲を土塁と低木とで生垣とした塀越しに、通りすがりのこの男の行く手を追っていた。が、急に母屋に駆け込んだ。

時節は十月、豊前国では最高峰の彦山の麓、高山の槻木つきのきの里はすでにススキの穂は黄色く色づき、榎ぶな、银杏の葉も黄金色に衣替えの最中で、青々とした杉林の中の紅葉も、夕陽に映えて一層引き立っていた。

この地、豊前下毛郡毛谷村からは直接に西方の彦山は望めないが、東北の方角に目を移すと大ヶ岳が控え、彦山からの西日が山頂を照らしていた。

「旦那様、いま表門の前に薄気味悪い者が立ってこちらを覗きこんでいますよ。一寸、見てもらえませんか」

「どれどれ、今行く。念のために槍を用意しておけ」

下男にそう言つて、彦右衛門はあわただしく玄関からの石畳に草履を滑らすように小走りであわただしく表門に向かった。

一味齋の闇討ち（抜粋）

「吉岡一味齋殿、過つては元就公よりの普請奉行を務め二度目の奉公とはいえ、ご老体の身ながら大儀じや。普請の工夫、資材は確保してあるので心配無用じや。貴殿の宿は錦帯橋の近くの幸国寺に手配してある。必要なものや難儀があれば遠慮なく相談に参れ」

「ハッ、数々のご配慮、恐悦至極に存じます」

「ところで錦帯橋は錦川の洪水に耐えられることが必然じや。過去の何度も流失しているが、一味齋殿はいかがお考えか？ 過去のことは水に流しても橋は流すわけにはいくまい」

「そのことで考えがございます。架橋の着工前に、明日にでも山口と萩に向かつて出立し、妙案を固めたく考えて居ります。先ず山口では海外からの渡来者の博識の知恵を活用し、加えて、萩には吉見家前当主吉見正頼殿がよしみまさより隠棲する指月城のいんせい総門の一つにしづきしやう勿橋と云う珍しい構造で橋脚きははしの無い平安橋があるそうで、これを見分して錦帯橋の洪水対策に役立てようと考えております」

「そうか、広く技術の粋を見聞して参れ」

桂能登守は一味齋の先見に頷いた。その後、一味差異は宿となる幸国寺を尋ねた。城を出て錦川を渡るとその先に宿があった。そこには、絹川が待ち受けていた。

「首尾無事に終わりましたか？」

日ノ本一の御前角力（抜粹）

土俵に上がる各郷土の力士は猛者が多く、秀吉公の目の前で名を馳せたいばかりに若い順番をと望むものが多くなることを考慮して、十時傳右衛門は、奉行役・諸大名・城主から申請された総勢三十八人と六助の取組表を作り貼り出した。そしてその写しが秀吉公の手元にも届けられた。

関白殿下御前角力取組

東方

- | | | | |
|-----|------------------|----|--------|
| 一番、 | 近江蒲生八幡山城城主豊臣秀次 | 家来 | 宮川政房 |
| 二番、 | 近江佐和山城城主堀尾吉晴 | 臣 | 別所定之進 |
| 三番、 | 伊勢松ヶ島城主蒲生飛騨守氏郷 | 臣 | 三宅喜内 |
| 四番、 | 大和郡山城城主羽柴中納言秀長 | 家来 | 天野源右衛門 |
| 五番、 | 安芸吉田郡山城城主毛利右馬頭輝元 | 臣 | 杉森伯耆守 |
| 六番、 | 安芸日野山城城主吉川治部少輔元長 | 臣 | 生石中務 |

- 七番、 近江蒲生八幡山城城主豊臣秀次 家来 中島三太夫
- 八番、 越前若狭後瀬山城城主丹羽加賀守長重 家来 上田彌左衛門
- 九番、 道作奉行片桐直盛 臣 多羅尾半左衛門
- 十番、 近江長浜城城主山内対馬守一豊 臣 中野源太夫
- 十一番、 美濃大垣城城主一柳直末 臣 古川勘兵衛
- 十二番、 堺奉行石田治部少輔三成 家来 太山伯耆
- 十三番、 淡路志知城城主加藤左馬助嘉明 臣 塙團右衛門直之
- 十四番、 阿波徳島城主蜂須賀阿波守家政 臣 樋口内蔵之助
- 十五番、 加州石川金澤城城主前田肥前守利勝 家来 山崎庄兵衛虎武
- 十六番、 播磨明石船山城城主高山右近太夫長房 家来 餘理八郎太夫
- 十七番、 土佐岡豊城城主曾我部彌三郎元親 家来 中内源兵衛尉
- 十八番、 伊賀上野城城主筒井伊賀守定次 家来 松井右近
- 十九番、 豊臣軍軍監黒田孝高 臣 母里太兵衛友信
- 二十番、 福島左衛門大夫正則 家来 桂市兵衛
- 二十一番、 羽柴左近衛権少将三河守秀康 家来 梶原助蔵
- 二十二番、 福島左衛門大夫正則 家来 可児才蔵

二十三番、	京都奉行近江大津城城主淺野長吉	家来	龜田權兵衛
二十四番、	備後三原城城主小早川左衛門佐隆景	臣	井上五郎兵衛
二十五番、	美濃岐阜城城主池田三左衛門輝政	臣	片桐半右衛門
二十六番、	備前岡山城城主宇喜多秀家	臣	花房助兵衛
二十七番、	增田右衛門尉長盛	家来	浮島典膳
二十八番、	生駒雅樂頭親正	家来	大島大助
二十九番、	兵站奉行大谷刑部少輔吉繼	臣	湯淺五助
三十番、	丹後田辺城城主長岡越中守左少将忠興	家来	澤村才八郎
三十一番、	丹後田辺城城主長岡越中守左少将忠興	臣	小笠原秀清
三十二番、	越前北ノ庄城城主堀左衛門督秀政	臣	堀監物直政
三十三番、	近江佐和山城城主堀尾吉晴	家来	眞田三郎左衛門清景
三十四番、	近江蒲生八幡山城城主豊臣秀次	家来	稻富二郎兵衛
三十五番、	備前岡山城城主宇喜多秀家	臣	進藤三左衛門正次
三十六番、	佐々陸奥守成政	家来	稻葉助之進
三十七番、	加藤主計頭清正	臣	木村又藏
三十八番、	筑前立花山城城主立花左近正将監宗茂	臣	十時傳右衛門

西方

豊前小倉城城主立花左近正将監宗茂

豊前毛谷村

貴田孫兵衛統治

行司

筑前立花山城城主立花左近正将監宗茂

臣

十時傳右衛門

飛入り（抜粹）

先程来の秀吉の茶目つ気の振舞を楽しんでいた十時傳右衛門は次の呼出しに掛かかり、取組表の方角に視線を向けた。そして、足が土俵場に掛かろうとした時、

なかむらしきぶのしょうゆうかすうじ

わたなべかんべえ

「待った。一寸待った。私は、近江水口岡山城城主中村式部少輔一氏の家来、渡辺勘兵衛と申す。この角力は、諸国の郷土一が選ばれている聞き及んだが、拙者の様に郷土一どころか畿内一と呼ばれる者が何故選ばれてない。十時傳右衛門殿は角力が始まる前に申したなア。日ノ本一の角力試合だと。拙者の出ない角力が何で日ノ本一の角力試合じゃ。えエ、そうでは御座らぬか！」

十時傳右衛門は返答に窮した。

黒田孝高の策略（抜粋）

十九番手は豊臣軍監黒田孝高の家臣母里太兵衛友信である。ぐんかんくろだよしただか もりたへえとものぶ

黒田孝高はこの九州征伐には軍監の任にあり、豊臣軍の被害を最小限に抑える為に、秀吉の本隊が出陣する前に毛利軍を先遣隊として昨秋の出陣を促し、加えて敵方との戦いは極力避けて味方に引き込む為に、孝高自身も去る十月に九州入りして豊前・筑前の諸城に対し調略を尽くして来た。それに従わぬ城主には毛利の先遣隊を差し向け城攻め敢行し、城井郷の宇都宮氏の属城である中津街道沿いの宇留津城、秋月街道の軍事・交通の要衝にある筑前の国人、秋月種実の子元種の居城香春岳城を陥落させて、すでに豊臣軍の傘下としていた。

秀吉は、事あらば孝高を呼びつけ任を授け、事の結末を報告させると云う常に自分の手綱の先に孝高を繋ぎとめておくと言う事が癖に成っていた。それは、信長の横死の報に秀吉は取り乱していたが、孝高は冷静に事態を読み切り、『御運が開かれる機会が参りましたな』と人の心底を抉り、中国大返しを秀吉に進言、以来秀吉は孝高の才智を高く評価し、天下の座を唯一狙える資質を有しているとの認識から、その智謀を恐れて禄高は程々にし、参謀として身近に置き常に目を光らせていた。この角力御前試合も御多分にもれず、角力の始まる前に秀吉から六助の活用を言い渡され、孝高はそれを念頭に置き六助の動きを注目していた。

又蔵の地力（抜粹）

三十七番手かとうかずえのかみきよまさに加藤主計頭清正の家臣木村又蔵が呼び出された。

「にいイ、ろくすけ、ろくすけエ、……、ひがし、またぞう、きむら、またぞう、オ」

加藤主計頭清正、別名虎之助は二十四歳、秀吉の子飼いの家臣で、賤ヶ岳の七本槍・七将の一人である。身の丈だけでも六尺五寸あり、これに長烏帽子形兜を被っていた時は、更に大男に映ったであろう。秀吉の臣下だけの角力では疑いも無く此の男が日ノ本一であった。

尾張中村の地に刀鍛冶加藤清忠かとうきよただの子として生れた。幼少の頃父を亡くし、母は鍛冶屋の娘で秀吉の母と従姉妹であったことから、天正元年（一五七三）、秀吉が長浜城の城主に成ると志願し小姓として仕えた。以来、清正は秀吉に忠義を尽くし戦地に従軍しまた武功を上げた。

家臣木村又蔵は身の丈六尺七寸 目方四十一貫で丈は六助を上回った。

秀吉がまだ木下藤吉郎と称していた尾張・美濃の国境、洲股すのまたの城の城代の任にあった時、棒ぼう杭境かいの隣が井口越前守いぐちえいぜんのかみの領分で、その家来が洲股に遣って来ては、

「サルは仲間からの成りあがり者、お前等はよくも従属しておるなア、やっちまえエ」
と言つては城下を荒らしていた。

旅籠の一夜（抜粋）

「ご返事が遅れ失礼を致しました。六助、お菊殿今生の喜びとしてお受け致しまする」
祖父母の肩は震え、土間には二人の涙が点々と沁みていた。

「そうとなれば、もう一つ伝えたい儀がござる。輝元公より、そなた達を^{ねぎら}勞つて城下の^{はたご}旅籠を借りきつている。今晚は遠慮なく水入らずでゆつくり過ごせばよい」

粹な計らいだった。

六助はその晩、身内に囲まれてお菊と仮の祝言を挙げ、三三九度を交し、共に寢床を温めた。
翌朝、夜も明けぬ内にお菊は身だしなみ整え、出陣する六助を宿の戸口で待ち受けていた。

「お、お菊」

「今日から菊で宜しゅうございます」

「そうか、菊、行つて参るぞ。母上とお園殿、それに毛谷村の母も宜しく頼む」

「ハイ、承知しました。御武運を祈ります」

秀吉の軍は九州の東を南下する日向の陣立てと、西を迂回する肥後の陣立て総勢二十万の軍勢が島津を目指して動き始めた。その中に黒田孝高の下に馳せ参じた六助の姿があった。

六助の額に捲いた白木綿の鉢巻きは、昨晚六助が寝静待った後に、お菊が長襦袢ながじゅばんの襟元を解いて鉢巻きに仕立てたもので、その端には赤糸で『武運貴田孫兵衛統治』と刺繡ししゅうがしてあった。六助にとっては、敵味方も無くこの豊前の地が血に染まることだけは避けたいの一心の思いであった。

(完)

資料1 六助の出生・死亡の諸説 (抜粋)

(注1) 本書『六助の義』では、六助は弘治二年(一五五六)に出生とした。

六助の出生年は三説(注2)あり、弘治二年(一五五六)、豊前今井村(福岡県行橋市)にて出生とした。

資料2 六助の年譜 (抜粋)

◇年代譜の見方◇

【九州の統治を巡る覇権争い〜六助誕生まで】……………三区分で構成

△中国▽ ……地域・事変の括り

永祿十年(一五六七)…六助 十一歳 ……年号(西暦)…六助の満年齢

三月 六助 『六助』吉岡一味斎 彦山に参詣。 ……月日 太字『六助の義』の年譜

毛利 再び九州へ進攻。 ……国名・大名等 事変概要

事変年月日は出典による

丸数字は大友軍の兵火回数

*数字は資料3に符合する

天正十五年(一五八七)

一月十五日、十六日

六助 一味斎妻子三人が六助宅を訪問。*はまご

一月二十五日秀吉 宇喜多秀家出陣

一月末 『六助』 一味斎妻子、中国・畿内で京極内匠の足跡掴めず広島に帰還。墓前報告。

二月上旬 秀吉 出陣*

二月五日 『六助』 小倉武士三人が彦山に遠出、薬師峠で落馬。六助と諍い。

二月八日 『六助』 小倉武士三人と師匠天野小傳が六助宅へ向かう。仕官を要請。

二月十日 豊臣軍 秀吉の弟秀長が出陣（日向方面）した。^{＊30}

二月十日 『六助』 一味齋妻子、九州へ京極内匠を追い求め出発。

二月十三日 『六助』 六助の御前試合の高札が城下に立つ。

『六助』 微塵彈正が高札を確認。

二月十五日 『六助』 微塵彈正、毛谷村で六助に御前試合の譲り勝ち懇願。

二月十五日 秀吉 御前角力試合、六助角力三十四人抜き。

六助 一味齋妻子三人が仇討ち果たす。内匠四十八歳。

六助 一味齋妻子三人は毛利家へ戻る十六助・お園の結婚無し。^{＊31}

二月十五日 『六助』 一味齋妻子、赤間着。

二月十六日 『六助』 一味齋妻子、小倉着、城下にて高札を確認。

二月十八日 『六助』 一味齋妻子、毛谷村で六助に再会。

二月二十五日 六助 一味齋妻子三人が小倉城外広野で仇討ち果たす。^{＊32}（秀吉未着で不整合）

二月二十五日 六助 一味齋妻子三人が小倉にて仇討ちをした。^{＊33}（出典 大日本人名辞書 経済雑誌社）

二月二十一日 『六助』 六助、御前試合日の通知あり。

二月二十六日 『六助』 六助、御前試合で小倉に向かう。

三月上旬 秀長 小倉入り（出陣以来二十日後）。

秋月 島津に属し、豊臣に抵抗したがその勢力は比でなく降伏し、名器檜柴肩衝を献上し降

伏は許され、戦後日向に移封さる。^{＊32}

三月 豊臣軍・島津 豊臣方は直ぐに豊後を攻めず高野山の僧木食応其を使者として府内城の島津義弘に講

和を勧めたが拒否。義弘は戦局を鑑みて豊後松尾城（豊後大野市）の島津家久と共に

撤退し、北部九州を放棄して、薩摩・大隈・日向の守りを固める方針に転換した。
三月一日 秀吉 大坂を出立した。

三月一日 『六助』 六助・微塵弾正の御前試合。

三月二日 『六助』 六助、御前試合の手負い姿で帰宅。

『六助』 微塵弾正の偽名・一味斎闇討ち・御前試合の偽計発覚。

三月四日・五日

『六助』 六助とお園が微塵弾正の素性内偵。

三月十四日 『六助』 立花山城立花本家家老十時傳右衛門、小倉入り。

『六助』 当主立花宗茂から小倉城城代立花増時に秀吉公受入準備の命を伝達。

『六助』 小倉立花家で軍陣祭、太閤殿下御前角力日ノ本一の日取り決め。

『六助』 小倉立花家六助、微塵弾正との再試合日取り決め。

三月十五日 秀吉 小倉入り。※ 秀吉も九州入り、軍勢は総勢二十万。※

天正十五年（一五八七）

三月十六日 『六助』 六助、一味斎妻子と中詰の雪舟庭を訪問、一味斎の供養。

『六助』 六助、再御前試合日の通知あり。

三月十八日又は十九日

大友 家臣佐伯惟定は島津軍を豊後・日向国境で追撃した（梓越の戦い）。

三月十九日 島津 島津義弘は高城（宮崎県児湯軍木城町）に撤退。

三月二十日 島津 義弘・家久は共に都於郡城（宮崎県西都市）に退く義久含め三人で軍議。

三月二十一日 秀吉 黒田孝高に九州征伐の陣立朱印状（三月二十一日付）を宛てる。

日向の陣立

一番隊 黒田孝高・蜂須賀家政

二番隊 小早川隆景・吉川元長

三番隊 毛利輝元

四番隊 宇喜多秀家・因幡衆（五大名）

五番隊 小早川秀秋

（番外 筒井定次・溝口秀勝・森忠政・大友義統・脇坂安治・

加藤嘉明・九鬼嘉隆・長宗我部元親）

（総大将 豊臣秀長）^{※2}

注…前田利勝…天正十七年利家に改名、初名利勝に変更した。

三月二十二日毛利

輝元が秀吉を山口で案内。[※]

『六助』

輝元が秀吉を山口に案内。（当初の岩国錦帯橋の渡り初め式計画は撤回）

宇都宮

秀吉よりの宇都宮に島津征伐への参陣要請に応えず。息子を参陣させた。

三月二十五日秀吉

赤間関着、秀長と戦略会議

三月二十五日秀吉

赤間関着、秀長と征伐協議…陣立てを決める

総大将秀長…豊前↓豊後↓日向↓薩摩

総大将秀吉…豊前↓筑前↓肥後↓薩摩

黒田孝高に九州征伐の陣立朱印状（三月二十五日付）を宛てる。

秀吉

肥後の陣立

一番隊 毛利吉成・高橋元種・城井朝房

二番隊 前野長康・赤松広英・明石則実・別所重宗

三番隊 中川秀政・福島正則・高山長房

天正十五年（一五八七）

三月二十六日秀吉

赤間関着。^{＊2}

三月 中間

中間統胤は秀吉の九州入りの際下関に出迎え、山国郷の状況を報告。

（中間氏は宇都宮の直系で大友傘下であったが、頭越しに黒田に密書を送る。また門司にて秀吉に謁見したとの説もある）

三月二十六日

『六助』

六助、微塵弾正と再御前試合

『六助』

一味斎妻子、仇討ち果たす

四番隊 長岡忠興・岡本宗憲

五番隊 丹羽長重・生駒親正

六番隊 池田輝政・林 為忠・稲葉貞通

七番隊 長谷川秀一・青山忠元・木村重茲^{しげこれ}

八番隊 堀 秀政・村上義明

九番隊 蒲生氏郷

十番隊 前田利勝

十一番隊 豊臣秀勝

（総大将 豊臣秀吉）^{＊3}

注・長岡忠興・將軍足利義昭が信長により追放された元龜四年（一五

七三）から慶長二十年（一六一五）大坂夏の陣間は、

姓を細川から長岡とした。その前後は細川。

三月二十六日・二十九日 御前相撲(説)

六助 角力三十六人勝抜き。*2

三月二十八日秀吉 小倉城着。

『六助』 秀吉公、小倉着

三月二十八日秀吉 九州入り、軍勢は総勢二十万。

三月二十九日秀吉 豊前馬ヶ岳(行橋市)まで進軍、軍議。

『六助』 軍陣の祭り

『六助』 太閤殿下御前角力の奉納

『六助』 六助、三十七人勝抜き

『六助』 六助・お菊と祝言を挙げる。

秀吉 小倉城着。*3(注…「古今実録豊臣鎮西軍記・六助仇討ち」は秀吉の九州遠征と不整合)

六助 角力三十六人勝抜き、お菊と結婚。お園は衣川と芸州帰国後に結婚。

三月 彦山 秀吉が小倉入りすると、彦山座主・舜有は使僧を送って降伏を申し出たが許されず。*30